タワーアンドマスター

yasuhiro0901

出会いは奇跡？それとも必然？

　ニュースキャスターが淡々とニュースを読み上げる。
「次のニュースです」
「今、深刻な問題になっているエネルギー不足。現状を知るために佐藤リポーターが現地にいます」
「佐藤さん」と現地のキャスターに呼びかける。
「はい」
「現地に来ています。資源の減少により、食糧の運送に時間が掛かるまたは、届かないなど生命に関わる重大な問題になっています」

　星がよく見えて、きれいだと夜空を眺めながら思った。そして、視界を正面に戻す。
　そこには、雲に届きそうな真っ白な塔が存在していた。その塔は随分昔に建てられたもののようだ。
　何の目的で建てられたのかは分からない。でも、塔には魅力があった。
　なぜだかわからないが惹きつけられるのだ。だから、よくこの場所に来る。この塔を見るために。
　塔を眺めていたら、突然大きな音が聞こえた。驚いて、そちらの方を凝視する。
　暗くてはっきり見えないが、倉庫らしき建物の脇に２つの人影らしきものが見える。
　そちらに意識を集中すると、かすかに話し声が聴こえる。
「おと・・・しろ！」
　どすの効いた男性の声。
「やめ・・・ください。離して！」
　こちらは若い女性の声。
　聴こえてきた会話から、どうゆう状態かを想像すると、頭の中で１つの解答が浮かぶ。
　すっと立ち上がり、声が聴こえた方向へ歩き出す。
　まだ、言い争う男性と女性の声が聴こえる。自然と足を動かすスピードが速くなる。
　近くまで行くと、視界が明瞭になり、２人の姿が露になる。
　男性の方は真っ暗なスーツに身を包んでいる。体型は細めで背が高い。年齢は４０代だろうか。髪に少し白髪が混じっている。
　顔を真っ赤にしながら、怒鳴っている。
　女性の方はフリル付きの青いワンピースを着ている。体型はほっそりしていて、身長は150センチぐらいだろうか。顔にはまだ幼さが残る、中・高学生ぐらいだろうか。背中まで黒髪が伸びている。
　少女も苛立っているようだ。男に掴まれた左手を荒っぽく振って、男から逃れようとしている。
　この状況をどうにかしようと思い、思いっきり大きな声で叫ぶ。
「おーい！　誰か来てくれ！」
　すると、すぐさま２人が驚いた表情でこちらを見た。
　すぐに男が動く。血相を変えて、こちらに向けて走り出した。
　脳内で警戒音が鳴った気がした。
　こちらも180度ターンして、走る。
（ヤバイ！　叫んだら、逃げてくれると思ったのに、追っかけてくるなんて）
　人目につきそうなところまで逃げれば、大丈夫だと思うが、人目につきそうな商店街に辿り着けそうにない。商店街のシンボルが遠くに見えるぐらいだ。
　息があがってきた。
　男の足音が徐々に大きくなる。
　力を振り絞って全力疾走しようとした瞬間、後頭部に衝撃が襲った。そのまま、前方に倒れてしまう。
　立ち上がろうとしたが、背中に重圧を受け、地面に叩きつけられる。そして後ろから首を絞められる。
（殺される！）
　必死に男の腕を叩いたり、引きはがそうとするが状況は変わらず、すごい力で首を絞めてくる。
段々、身体に力が入らなくなり、視界も暗くなる。
（このまま死ぬのか）
　諦めかけたとき、すぐ後ろあたりからドンと音がして、背中の重圧が弱まる。
　今がチャンス！と抜け出し、距離を取る。そして、何が起きたのかを確認するべく、振り返った。
　男は膝を地面につけ、何かを睨みつけていた。その方向を見ると、連れ去られそうになっていた少女が立っていた。
（なにが起きたんだ？）
　状況を把握できず、困惑していると、男が叫び、少女へ向けて走り出した。
（このままでは少女が危ない！）
　なにか男を止めるものはないかと周りを見渡す。

　それは男と並ぶようにはみ出ていることを見抜く。
　棒状のものが落ちているのを発見。急いでそれを拾い、投げようとした瞬間、棒状のものから電撃が放出される。放出された電撃は矢のように一直線に男の方へ直進して、貫いた。
　電撃が男の身体中を駆け巡り、「ぐぁ」と声が漏れて、男が倒れる。
　あまりの出来事に投げる格好で止まってしまう。
（何が起きたんだ？）
　またもや状況を把握できず困惑してしまう。なぜ、棒から電撃が出たのか？
　相当、呆けていらのだろう、おろおろと少女が声をかけてきた。
「あの～、大丈夫ですか？」
　その一言で現実に引き戻され、「大丈夫だよ」と答える。
　さっきの棒を見せながら、
「確認したいのだけど、これから電気みたいのが出たよね？」
　さっきの出来事が幻想ではないことを証明するために聞いてみる。
　その質問に対して、少女は首を傾げる。
「私からは見えませんでした。そこに倒れている男の斜線上にあなたがいたので」
「そうか。ありがとう」
「でも・・・男は感電して倒れたのは見ました」
　少女のその一言で、すこし嬉しくなった。
「だよね！」とハイテンションなトーンで言ってしまった。恥ずかしい。
「・・・えぇ」
　驚きながらも、返答してくれた。
　棒から電撃が出たときのことをを説明した。
「そうだったのですね。私にも何故だかはわかりませんが」
「そうか。ありがとう」
　まだ気になることはあるが、今は置いておいて、これからどうしよう。
　倒れている男をほっておくのは、危険な気がする。警察に連絡しようかな。
　考えていると、少女から声がかかる。
「警察に通報しても無駄ですよ。逮捕できませんから。ここを早く離れましょう」
「なんで逮捕できないの？」
「前に通報したことがありますが、逮捕して貰えなかったからです」
　ただの悪戯だと思って逮捕して貰えなかったのか、それとも、この男は警察を黙らせる大きな組織に所属しているからなのか。
　ただ、ここに長居するのは危険だと感じた。
　どこに行くべきかを考えていると少女から声がかかる。
「今日、あなたの家に泊めてもらえませんか」
え？なんでといきなりのことで戸惑う。
「お金は払うので、一日だけ泊めて下さい！」
　凄い勢いで頭を下げられてしまった。少女の必死さに驚いた。疑問はいつから浮かぶものの、またあの男が来たら危険なので、承諾する。
「やった！」
　手を万歳して、ジャンプしている。
（そこまで嬉しいか？）
「行くぞ」
　棒をポケットに仕舞い、自宅に向かって、歩き出す。
　少女も走って、横に並ぶ。
「今日はありがとうございました」
　ぺこりと頭を下げる。
　律儀なやつと思った。
「別にいいよ。こっちも助けてもらったし」
　少女が何かに気が付いた表情をして、
「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私、本庄美紀と申します。よろしくです」
　それはまた、ご丁寧に。
「朽木室矢だ。よろしくな」
「よろしくです。室矢さんの家へ、レッツゴー！」
　右手を挙げて、元気な声で叫ぶ。
　しっかり、名前で呼ばれているが、まあいっか。
「じゃあ、美紀をご案内」
　と言って、美紀の方を見ると、無垢でまぶしい笑顔がそこにはあった。

明日の予定

　自宅へ戻り、冷蔵庫の中を確認しながら、
「夜ご飯は何がいい？」
　と問う。
　すると、すぐに返事が返ってくる。
「作っていただけるのですか！　室矢さんのおすすめで、ぜひ」
　レストランか！と思ったが、黙って、調理を開始する。
「なぜ、室矢さんはあの場所にいたのですか？」
　突然、質問が飛んでくる。
「塔が好きだからだよ」
　素直に答える。
「塔が好き？」
「あぁ、何だか俺はあの塔に惹かれていて、放課後によく行くんだ」
「そうなんですね。塔の近くまで行ったことはありますか？」
「いや、ない」
　行ってみたいと思ったこともあるが、なにせ、塔の近くまで行くのには、電車で３時間ぐらい掛かるのだ。
「じゃあ、行ってみませんか？その塔に」
「近くまで行ってもなにもないぞ」
　ただ、白い塔が立っているだけなのだ。
「私も行ったことがないのですよ。あの塔に」
（この機会に行ってみるか）
「まあ、明日は休みだし、いっか。でも長い時間、電車に揺られるから、頑張れよ」
「はい♪」
　本当に元気だな。
　夕食を食べ終え、風呂の支度をする。
　自動で15分後には湯が浴槽に満たされる。
　明日は早めに出る予定なので、先に美紀に入ってもらう。
「お先に失礼します」
「あぁ」
　美紀が風呂から出てくるのをテレビを観ながら待つ。
(色々なことがあって、疲れたな）
　疑問は多々ある。なぜ、美紀をあの男が連れ去ろうとしたのか、棒から電撃が出たのか。
　考えに耽っていると、美紀が風呂から出てきた。パジャマ姿になっていた。
　昔に母が使っていたものがあったので、貸した。
「お待たせしました」
「あぁ。部屋まで案内するよ」
「よろしくお願いします！」
　空き部屋へ向かって歩き出すと、テクテク後ろをついてくる。
　リビングから出て、すぐ脇の階段を上がり2階へ。
　階段を上がって、目の前の扉を開ける。
「ここを使ってくれ」
「はい！」
「おやすみ」
「おやすみなさい！」
　勢いよく部屋に入り、わーすごーい！と聞えてきたが、バスルームへ行き、風呂に入る。
　いつもと違って、ちょっとドキドキする。なんだろう、この気持ちは。
　不思議な気分なまま、自分の部屋に行き、寝た。

いざ、白い塔へ

　じりじりじりという目覚ましのアラームで目を覚ます。
　いつものように、パジャマから私服に着替え、脱水所で顔を洗い、髪を整える。その後、リビングで朝食を作る。
　今日の朝食は、スクランブルエッグとハム、白米だ。それらをテーブルの上に並べたところで気が付く。
（美紀がいない。まだ寝ているのか？）
　すっかり、昨日の出来事が頭から消えていた。
　急いで、美紀がいる部屋まで行き、ドアをノックする。
　少し待つが、応答がない。
「入るぞ」と言って、部屋に入る。
　すると、ベッドの上で爆睡している美紀を発見。
　掛け布団は床に落ち、寒かったのか、丸まって寝ている。
　笑顔でよだれを垂らしながら、「えへへ」とか、呟いている。
　楽しい夢でも見ているのだろうか。
　いつまでも見守っていては、明るいうちに帰ってこれないので、そろそろ現実に帰ってきてもらおう。
「おい、起きろ」
　美紀の身体を揺する。しかし、反応がない。
（仕方がない。あの手を使うか）
　リビングにある冷蔵庫から、アイス枕を取り出し、美紀が寝ている部屋に戻る。
　相変わらず、爆睡している美紀のおでこにアイス枕を押しつける。
　美紀が「冷た！」と大きな声で言って、飛び起きる。
　美紀は周りを見渡して、俺を見る。
「優しく、起こしてくださいよ」
　頬を膨らませていた。
「一回揺すったけど、起きないからだよ」
「もっと心に余裕を持って、起こしてしください！朝だよ、美紀～みたいな感じで」
「それは、余裕の問題ではないぞ。早くしないと置いていくぞ！」
「分かりました～」
　美紀がまだ眠そうに目を擦りながら、ベッドから降りる。
「朝飯作っておいたから、早くリビングに来いよ」
　念を押して、リビングに戻る。
　スクランブルエッグが半分になった頃、美紀がリビングにやってきた。青のワンピース姿になっていた。
「おはようございます」
「おはよう」
　美紀が椅子を引いて、俺の反対側に座る。
「わぁー！とても美味しそうです！」
　表情が輝いていて、よだれが出ている。
「よだれ出てるぞ」
　指摘すると、すぐに手で拭う。
「すいません」
　真剣な表情になるが、少しすると、またよだれが出ていた。
「さっさと食べていいぞ」
　待っていました！という表情になり、
「いただきまーす」
　手を合わせた。
　そして、スクランブルエッグを白米の上に乗せ、勢いよく食べ始めた。
　勢いよく食べすぎと思うが、作って方としては嬉しい。

　朝食を食べ終え、必要なものを持って、家を出た。
　近くの駅から電車に乗り、塔がある町に向かう。
　3時間ぐらいだろう。長い道のりだ。
　電車内ではスマホをいじって、時間を潰していた。
　ふと、気が付く。やけに静かなことに。
　いや、本来なら、普通のことであるが、美紀がいる状況で、静かなのはおかしい。

まだ、出会ってばっかりで、よく知っているわけではないが、出会ってから現在までの行動から推測するに、元気いっぱいでよく喋る印象があるのだが、なぜか静かだ。
後方を向くと、顔色が悪い美紀がいた。よく見ると、口を手で押さえていた。
これはやばい。今にも吐きそうだ。
ちょうど、駅に着く。まだ、塔がある町の駅まで、まだまだだが、美紀を連れて降りる。
あまり長く立っていることに慣れていないのかもしれない。
「大丈夫か？　深呼吸するんだ。」
「おえ」と聴こえた。今にも吐きそうだ。
「吸って、吐いてを繰り返すんだ」
美紀が駅ホームの椅子に座りながら、息を吸って、吐いてを繰り返す。
７、８回繰り返していると少し顔色がよくなってきた。
「少しは楽になったか？」
「なんとか、大変なことにならずに済みました。室矢さんありがとうございました」
こちらとしても、一安心だ。
「あぁ」
（そういえば、飲み物があれば元気になるかもな）
「美紀、飲み物何がいい？」
すると、パッと表情が輝いた。
「買ってもらえるのですか！何がいいかな～」
少し間があった。思考中のようだ。
「もしあれば、オレンジジュースをお願いします。なければ適当で」
「了解」
近くの自動販売機まで行く。
商品を一通り見る。オレンジジュースを発見。俺はコーラにでもしよっかな。
お金を投入し、ボタンを押す。
自動販売機の取り出し口からオレンジジュースとコーラが顔を出す。
オレンジジュースとコーラを取り出し、美紀の元へ戻る。
「おらよ」
オレンジジュースを美紀の手の上に置く。
相変わらず、表情を輝せながら、
「ありがとうございます！」
「おう」
と答えて、塔がある方向を見る。
あの塔には何があるのだろうか。塔内に入る、入口はなく、なんのために作られたのかもわかっていない。記録に残っていないらしい。
少し前までは、調査だかなんだか知らないが、立ち入り禁止だったが、今では観光地になっている。なので、近くまで行くことができる。
美紀の方を見ると、オレンジジュースを顔よりも上に上げ、左手は腰にあて、ごくごく飲んでいた。
どこで得た知識だよ。
「ぷは！やっぱりオレンジジュースは美味しい！」
キャップを開けて、コーラを飲む。
（うまいな）
アナウンスが流れる。
「1番線に電車が参ります。黄色い線より、下がってお待ちください」
急いで、コーラを飲み干す。
「飲み終わったか？」
「はい」
「そのペットボトル渡してくれ、捨ててくるから」
美紀に向かって、手を差し出す。
「ありがとうございます」
ペットボトルを俺の手の上に置く。
走って、ごみ箱に向かう。
視界に電車が映った。
ごみを捨て、美紀の元に戻る。ちょうど、電車がホームに着いた時だった。
「もう少し頑張ろうぜ」
「はい」
そして、2人は電車に再び、乗り込む。

それから、1時間後。目的の駅に到着する。
「やっと着きました！」
「まだ、着いてないぞ」
塔までは歩いて、30分ぐらい掛かる。
「え～、歩くのですか～」
相当いやそうに言う。
確かに、俺でもここまで来るのに、疲れた。
確か、近くに塔行きのバスがあるはずだが。
周りを見渡すと、バス停らしきものがあった。
バスが止まっていた。急いでそのバスのところまで行き、運転手に聞いてみる。
「このバス、あの塔の近くまで行きますか」
塔の方を指しながら質問する。
「行きますよ」
運転手にお礼を言って、美紀がどこにいるのかを確認するために駅の方を見る。
こちらに向かって、歩いているところだった。
「このバス、塔の近くまで行くみたいだぞ」
「本当ですか！」
小走りでこちらにやってくる。
「あぁ、乗ろう」
「はい！」

バスに揺られて、15分ほどで目的地に到着する。
巨大な塔が目の前にあり、上を見上げてしまう。
いつもの場所から見ても大きなと思っていたが、近くで見るとさらに大きく感じる。
観光客はまばらにいた。家族連れやカップルがいる。写真をを撮っている人が多い。
こんなところで突っ立っていても仕方がない。塔の周りでもまわってみるか。
「とりあえず、ぶらつくか」
美紀の方を向く。神妙な面持ちをしていた。めずらしいこともあるのだなと思った。
俺が見ていたことで我に返ったのか、あたふたしながら、
「と、とりあえず、ぶらついてみましょう！」
「あぁ」
2人は塔の周りをまわり始めた。

　塔の周りをまわってみたが、やはり入口らしきものはない。
　なんとなく、中になにかがありそうで、入ってみたいが、入口がない。
　何かが頭に当たる。手を出してみると、そこに水滴が落ちてきた。
　雨が降ってきたのだ。
（さっきまで、天気が良かったのに。仕方がない。もう帰るか）
　横にいる美紀を見る。しかし、いるはずの美紀がいない。
　周りを見渡す。
　雨が降ってきて、観光客たちが急いでバス停へ向かっている。
（どこに行った？美紀のやつ。）
「美紀ー。いたら返事をしてくれー」
　叫びながら、塔の周りをまわってみる。
　2人の男に連れ去れそうになっている、美紀をバス停とは反対方向の沿岸部で発見する。
「おい、美紀を離せ！」
　美紀の元に駆け寄る。
「室矢さん！」
　美紀は少し安堵したような表情をしていた。
　一人の男が美紀を押さえ、もう一人の男がこちらにやってくる。
　40歳ぐらいで、長身。髪の毛には少し白髪が混じっている。この体格、顔を見たことがある。
　昨日、美紀を連れ去ろうとした男だ。
　男の方も覚えていたらしく、悪そうな笑みを浮かべていた。
　男が突進してくる。
　考えろ、考えるんだ。この男を倒す方法を。
（男の突撃を避けて、攻撃する！）
　男の突進を避けるために右に飛ぶ。
　一回転して、男を攻撃しようと、男がいる方へ向こうした。瞬間、背中に大きな衝撃を受ける。その衝撃に耐えきれず、派手に地面に叩きつけられる。
　ころころと何かの音がした。
　そちらを目だけ動かして見ると、電撃を出せた、棒が転がっていた。
　棒へ手を伸ばし、なんとか棒を掴む。
　そして、それを後方へ、勢いよく突き出す。すると、電撃が迸る。
「ぐあ」
　後方から、男のうめき声が聞こえたあと、自分の上に何かが乗った衝撃を受けた。
　上に乗っているものを退かして、立ち上がる。
　予想どうり、例の男だった。

　美紀を押さえている男が唖然と倒れている男を見ていた。
　手に持っている、棒を前に突き出す。それを見て、美紀を押さえていた男は「ひぃ」と言って、逃げ去っていった。
　美紀が妙なことを呟いた。
「やはり・・・」
「やはり？」
　その時、重い扉が動くような音がした。音がした方を見ると、塔に入口らしきものが現れた。
　ぽっかり、四角の穴が開いていた。
（もしかして、塔への入口？）
「あそこにいたぞ！」
　スーツ姿の男たちが駆けてくる。人数が多い。
「美紀とりあえず、塔の中に入るぞ！」
「はい！」
　男たちから逃れるために、全力疾走で塔の中に入る。すると、開いていた穴が段々小さくなり、やがて、穴が塞がった。

　なにが起きたのだろうか。でも、なんとか、男たちに捕まらずに済んだことは確かだ。

　とりあえず、一安心だが、疑問が残る。
　なぜ、入口が開いたのか、意味ありげな美紀の呟きも気になる。
「室矢さん。あなたに話しておきたいことがあります」
　声をかけられて、美紀の方を見ると、真剣な表情でこちらを見つめていた。
　思わず、声がうわずってしまう。
「ど、どうした？真剣な顔をして」
　少しの間があって、美紀は語りだす。
「実は、室矢さんに隠していたことがあります。室矢さんが手に持っている、その棒のことやこの塔のことを私は知っています」
（え！？棒については知らないと出会ったときに言っていたのに）
　嘘をつかれていたことに、気持ちが沈む。
「嘘をついていたんだな」
「そのことについては申し訳ないです。あの時はまだ確信がなかったものですから」
「確信？」
「えぇ。室矢さんはこの塔がなぜ、作られたのかご存知ですか？」
「知らない。ニュースで、まだわかっていないと報道されていたぞ」
「この塔はエネルギーを保管するために作られたのです」
「エネルギーだと！」
（まさか、そんな目的があったとは）
「はい」
「おそらく、まだこの塔には物凄い量のエネルギーが蓄えられているでしょう」
　もう一つの疑問について聞いてみる。
「この棒は？」
「その棒は、この塔へ入るためのカギであり、エネルギーを放出するためのカギでのあるのです。なので、”Key”と呼ばれていました」
「スーツを着た男たちが、美紀を連れ去ろうとしたのは？」
「おそらく、私が持っているKeyを奪って、膨大なエネルギーを独り占め、または、売りさばくことが目的でしょう」
「世界のエネルギーが不足しているのは確かです。そこにエネルギーを売る人物、組織が現れれば、世界各国が飛びつくでしょう」
　美紀の言う通りなのだ。一部、エネルギーを十分に持っている国はあるが、ほとんどの国は不足している。
　重大な問題だそうだ。ニュースでも、そのことについて報道されていた。
「しかし、ある特定の人しかKeyを使うことはできません。それ以外の人が電撃を出せたり、塔の入口を開いたりできません。だから、私を連れ去ろうとしたのかもしれません」
　自分の中に大きな疑問がまだ一つ残っていることに気づく。
「美紀、君はいったい何者なんだ？」
　美紀は遠くを見つめ、
「私はこの塔の主を探すためにここにいます。その主を探して、偶然、室矢さんがいる町に行き、室矢さんに出会いました」
「美紀はなぜそんなことを？」
　聞かずにはいられなかった。
「自分の行動を疑問に思ったことはありません。この塔を作った父がよく私に言っていました」

「美紀、大きくなったら、この塔を守ってほしい。そして、この塔に眠るものを正しく使ってくれそうな人を探すんだ。いいね」
「うん」
「いい子だ」

「母は私が失敗するといつも私を叩いていました。しかし、父がいるときは、父が叩くのを止めてくれました。今度は父を助けたいと思っていたのです」
　美紀の話を聞いているとまた、疑問が浮かぶ。
　でも、この塔が作られたのは、ずいぶん昔だったような。
「私は室矢さんに決めました。この塔のエネルギーをどう使うかはマスター次第です」
　ん？マスター？
「なぜいきなり、室矢さんからマスターに呼び方を変えた？」
「室矢さんが私の主なのですから、マスターです！」
　久しぶりに笑顔を見た気がする。

「マスターならこの資源をどうしますか？」
　美紀が真剣な表情で聞いてくる。
　どうするべきか。貯めてそのままにしておくのは、未来に残すという意味では良いが、すでに不足し始めている状況で、黙って、こっそり貯めておくべきだろうか。
　しかし、このままにしておけば、そのうち、あの男たちがこのエネルギーを独占してしまう危険性がある。
　答えは決まった。
「この塔に眠るエネルギーを解放する」
「了解です。マスター」
　美紀が頷いてくれる。
「では、こちらです」
　美紀が歩き出す。案内してくれるみたいだ。
　美紀に導かれて、塔の上方へ向かった。

　目的の場所に着いたみたいだ。美紀に促されて、重そうな扉を慎重に開ける。
　ゴゴゴと音を立てながら、扉が開いた。
　中央には何かを祀るような台があるだけで、他にはなにもなかった。部屋は円状に広がっている。
「ここは？」
「ここは、エネルギーを制御するための場所です。あの中央にある台を見てください」
　中央の台に近づきながら、台を見る。美紀は隣を歩いていた。
「あの台に何かをはめるところがあります」
「Keyだな」
「はい。Keyをあの台にはめて、Keyに触れて、電撃が出します。それが、この塔に眠るエネルギーを解放させるのです」
　美樹の言う通りに、台にKeyをはめようとしたとき、電撃が身体を駆け巡る。
　力が入らず、床に倒れてしまう。
「マスター！」
　美樹が駆け寄ってくる足音が聞こえる。
　とっさに、さっき入ってきた扉の方を見る。
　すると、そこには、自分と同じくらいの年齢の男が立っていた。髪は茶髪で、耳にはピアス。どこかの制服を身につけていて、上着はボタンを外し、ズボンは腰パンだ。どうみても、不良？と思う格好だ。
　注目したのは、俺と同じ、Keyらしきものを持っていることだ。
「もしかして、それKey？」
　不良らしき少年に尋ねる。
「あぁ。Keyについてもう知っているんだ」
（塔のことも知っているか確認してみるか）
「じゃあ、あんたも知っているのか、この塔のこと」
「知ってるぜ」
「なら、話は早い。あんたには関係ない話だろう、立ち去ってくれ」
　面倒は避けたかった。しかし、少年は立ち去る様子もなく。
「立ち去る？実は俺にも関係がかなりあるんだよ。スーツ姿のおっさんたちからさ、あんたを捕えるか、殺してしまえばさぁ、数百万くれるってよ。うっひょー」
　不良というよりも、金に目が眩んでるな。なんとか、この男を気絶させることが出来れば！
　何か方法はないか。
　近くにKeyが落ちている。拾って、反撃出来れば！
　少年が美樹に気づく。
「お、可愛い子がいるね」
　美樹に気をとられている間に、近くにあった、Keyを手に取り、Keyを突き出そうとしたとき、また、　電撃が身体を駆け巡る。
「ぐはぁ」
　膝をつく。
「危ない、危ない。もう少しでこちらが攻撃されるところだったよ。邪魔だから眠っててもらおうか。」
　また、電撃が駆け巡る。駆け巡る、駆け巡る。
　遂には倒れてしまう。
（くそ！なにもできずに終わってしまうのか）

「もう動けないだろう。美紀ちゃんだっけ。仲良くしようぜ」
少年が美紀に近づこうと歩いているのが見える。
悪い予感しか頭によぎらない。
（させるかー）
自分自身を奮いただせる。
自然に声にも出ていた。
「させるかー」
なんとか立ち上がる。
少年と美紀が驚いた表情でこちらを見つめていた。
少年が遅れて動く。
「倒れろ」
少年がKeyを前へ突き出す。
そこから、電撃が出た。そして室矢の身体を貫くはずだった。
しかし、実際には室矢に届く前に電撃が消えた。
少年から、つぶやきが漏れた。
「そんな、ばかな」
Keyを突き出しながら、強く念じる。
糸を一つに集めるように、複数あるケーブルを結ぶように、細長い電気を束ねるように強くイメージする。
すると、Keyの先端に電気が集まり始める。やがて、大きな球状になる、バレーボールぐらいの大きになった。
今度はそれを押し出すような光景を強くイメージする。
球状になった、電撃が凄い速度で、一直線に少年へ突撃する。
少年はただ呆然とそれを眺めていた。
少年を電撃が貫く。
声も出ず、気を失ったようにそのまま地面に倒れる。
やった！やったぞ！
一気に嬉しさが込み上げてきた。
しかし、すぐに激痛が襲ってきて、呻く。
「マスター！」
美紀がこちらに向かって走ってくる。
「マスター。大丈夫ですか！」
「あぁ」
膝が地面につきそうになったが、踏ん張り、立ち上がる。
心配そうに美紀がこちらを見つめていた。
「マスター。休んだ方がよろしいかと」
俺は首を横に振る。
「いや、休んでいたら、また違うやつが来る可能性がある」
「では、マスター。肩を貸します」
美紀の肩を借りて、中央の台に向かって歩き出す。
2人は無言で歩く。
ただ、早くこの問題を解決しようと胸に秘めながら。
中央の台に辿り着き、Keyをはめる。
少し迷った。本当にこれでいいのか。この選択でいいのか。
美紀の方を向く。
彼女がこちらを見つめて、頷いてくれる。
これで、いいんだ。決意し、Keyに触れる。
突然、揺れた。小刻みに左右に揺れる。かなり大きい。塔全体が揺れているようだ。
美紀に支えられ、なんとか倒れずに耐える。
声を張って、言う。
「美紀、なにが起きた？」
「エネルギーの放出が始まったのです」
この揺れがエネルギーの放出によって、起きる？
エネルギーを放出するだけで、起きる地震なんて聞いたことがないぞ！

どれぐらい時間がたったのだろうか。やっと揺れが収まってきた。
（良かった。揺れが弱くなった）

（良かった。描れが弱くなった）
　ふと、美紀の方を見る。
　そこには、薄らした美紀がいた。
　むこうを向いていて、後ろ姿が視界入る。
　声をかけようと、美紀の肩に触れようとしたが、すり抜ける。
「おい、美紀」
「なんでしょう。マスター」
　振り返らず、言う。
「後ろを向いてないで、こっちを向けよ」
　美紀の顔あたりを叩こうとするが、すり抜ける。
（くそ、なにがどうなっているんだ）
　なぜか美紀に触れられない。
　美紀が振り返る。涙目だった。
「なに泣いてんだよ」
　笑みを返してくれるだけだった。
「なにか喋れよ」
　ようやく、美紀が口を開く。
「ありがとう・・・ござい・・・ました。父との約束を・・・果たすことが・・・できました。マスターの・・・おかげです」
「別にいいよ。俺だけ問題ではなく、世界中の人々に関わる問題だからな。それに、美紀には助けてもらったしな」
　美紀の姿が掠れ始める。
「私の役目は・・・終わりました。マスターは・・・いつもの生活に戻ってください」
「美紀も普通の生活をすればいいじゃないか！面倒見るから！」
　ここで止めなければ、美紀が消えてしまう気がした。
「もう・・・不可能です。役目を終えたら、消えるのが運命なのです」
　美紀の瞳から涙が頬を伝って、床に１粒、2粒落ちる。
「じゃあ、エネルギーを放出しなければよかったのか！なあ！」
　苛立って、詰め寄ってしまう。
「いえ、あの男たちによって、悪用されなかったので良かったのです。これが最善でした」
　真剣な眼差しで、はっきりと言う。
　美紀、お前強いな。
　突然、瞼が重くなる。抵抗するが、視界が徐々に暗くなる。
　完全に真っ暗になる直前、美紀の声が聞こえた。
「大丈夫です。ゆっくりお休みください。後のこともご心配になさらずに。私がやっておきますから」
「お休みなさいませ。マスター」
　そこで意識は途切れる。

　目覚めたのは、それから数日後の病院のベッドの上だった。
　一週間ぐらい入院だそうだ。とは言っても、重症ではなく、様子見みたいだ。
　クラスメイトもお見舞いに来てくれた。
　別に重症でないから、大丈夫だと言って、帰ってもらっていた。
　クラスメイトが妙なことを言っていた。
　エネルギー問題がなくなった。そんなことあるわけあるかと思った。世界的に問題だったのがそんなすぐに解決するとは思えなかった。でも、クラスメイトの表情は真剣だった。

　退院して、なんとなく、町外れの倉庫地帯にやってきた。
　そこから見える海は、絶景なのだ。
　大きな石の上に座り、広がる光景を見渡す。
　なにか違和感を感じる。
　海は絶景でよいのだが、何かが足りないような。
　何だっけ、なにかあったんだっけ。
　ふと、”みき”というフレーズが頭に浮かぶ。
　口に出してみる。
「み・・・き」
　なぜか、涙が流れた。

なぜか、涙が流れた。
（何で、涙が？）
　なぜだか、温かい気持ちになった。
　自然に口が動く。
「美紀、ありがとう」